カメムシの仲間 グンバイムシ

10種生息地 本県が最北か

弘大・相馬助教調査

「白神」23種、分布特徴示す

カメムシの仲間で、植物を餌とする「グンバイムシ」が県内で計24種生息し、このうち23種が世界自然遺産・白神山地の本県側にも分布していることが、弘前大学農学生命科学部付属白神自然環境研究センターの調査で分かった。24種のうち10種は、国内で最も北に位置する生息地となる可能性が示された。グンバイムシの分布の北限や境界として本県が重要な地域であることを示す成果で、地域の自然環境の特徴を考える基礎資料となる。（菊谷賢）

相馬　純助教

グンバイムシは多くの種が特定の植物だけを餌にする性質を持ち、植物の分布と密接に関係している。同センターの相馬純助教は、県内各地でグンバイムシを調査した。過去の文献記録や研究機関に保管されている標本も再検討した結果、県内で確認されているグンバイムシは計24種に上ることが分かった。

本県で生息が確認されたグンバイムシ24種のうち、上からウチワグンバイ、クスグンバイ、シッコクグンバイ、ヒゲブトグンバイの４種（相馬助教撮影・提供）

調査ではコケ類から草本、樹木まで幅広い植物に寄生する種が確認され、県内の自然環境の多様さが浮かび上がった。今回、フジグンバイとマツムラグンバイの2種が県内初確認となった。

また24種のうち10種は、本県が国内で最北の生息地となる可能性が示された。特定の樹木にしか寄生しない種もあり、本県西海岸など、限られた地域が分布の北限となっている例も確認した。

相馬助教は「成果は、本県と白神山地に分布する（特定の植物に強く依存する）植食性昆虫の特徴を議論するための基礎的な知見となる。今後、未記録種の探索や分類学的な検討を進めることで、地域の自然環境をより正確に理解できると期待される」と話した。

研究成果は昨年12月、日本半翅類学会の学術誌「Rostria（ロストリア）」に掲載された。

この画像は，当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。